

国際展事業委員会の講評は次のとおりです。

企画提案6件は、いずれもコンセプトや展示内容のみならず、展示方法や空間構成にも趣向を凝らした力作であった。限られた時間のなかで、出品作家や協力者との協働のもとに意欲的な展示プランを練り上げていただいたキュレーター諸氏に謝意を表したい。

審議の過程で浮上したその尺度なり目安は、いつものように多岐にわたった。テーマのアクチュアリティや斬新さ。作家・作品の取り合わせの説得力。日本からの声が世界に届くか否か、つまり地域性(日本らしさ)と世界性の兼ね合い。展示方法の先進性や、それと表裏の展覧会としての実現可能性。あるいはチーム編成の効力や妥当性など――。

採択された服部浩之の提案「Cosmo-Eggs | 宇宙の卵」は、下道基行による“津波石”の写真――人智を超えた強大な自然現象の遺物であると同時に、その後は動植物の生の営みの舞台となり、地域の人びとの信仰の対象などにもなった巨石の映像をおもな展示物としながら、現代音楽の作曲家・安野太郎、建築家・能作文徳、人類学者・石倉敏明との綿密な協同作業によって作成されたものである。「宇宙の卵」あるいは「人新世」といったキーワードのもとに、災禍をもたらすものとしての自然と、生を育むものとしての自然がバランスよく視野に収められている点が新鮮であった。会場構成などがより綿密に練り上げられることによって、人類の歴史と現在を、地球の「ほんの一瞬の被膜のような表面上」で起こった出来事のように見晴らす新しいパースペクティブが生まれることを期待したい。

日本館全体をフィクショナルな廃墟に変容させることによって虚・実の合間へと人をいざなう荒木夏実案、「翻訳者の使命」のテーマのもとに、さまざまなジャンルの古今の日本人作家(現代では梅田哲也と雨宮庸介)の作品を通じて異なる言語・文化・制度等のあいだに橋を架けようとする遠藤水城案、現代の動物園と美術館の照応や交差の分析を糸口に「生命の展示に向かって」構想された金井直案(白川昌生個展)、「血沸き、肉躍る」の表題のもとにおもに眞島竜男の“粘土パフォーマンス”によって構成される長谷川新案、そして近年の思想的潮流にも呼応するメディウム論を骨格とする林道郎による岡崎乾二郎+中谷芙二子の二人展案「場を生成し越境する波動としての「メディウム」:世界システムとしての美術」など。提案書はどれも概念的枠組みのしっかりした、読みごたえのあるものばかりであり、その点では甲乙つけがたかった。そのなかで服部案は、美術家と、建築家と、音響面の環境に関わる音楽家と、キュレーターと共にテーマの掘り下げに当たる人類学者からなるバランスのいいチーム編成などにも特色があり、これまでにない成果がそこから生まれることを期待して採択案とした。

国際展事業委員会(委員長以下、氏名五十音順 / 敬称略)

松本透 (委員長・長野県信濃美術館館長)
柏木博 (武蔵野美術大学名誉教授)
島敦彦 (金沢 21 世紀美術館館長)
中井康之 (国立国際美術館副館長/学芸課長)
長谷川祐子(東京藝術大学大学院教授、東京都現代美術館参事)
港千尋 (多摩美術大学大学院教授)